

ことばと文化の学び (4)
 - 学習者は「言語的多様性」をどのように捉えているか -
 Language and Culture Education (4)
 : Learners' Viewpoints of and Attitudes toward "Linguistic Diversity"

仲 潔
 NAKA, Kiyoshi

1. はじめに

「言語」は社会的なものである。例えば、「多言語状況」を考える場合、言語を数えられる名詞として捉え、それらが数千ほど並存している状況であるとする見方がある。言語を数えるためには、何らかの共同体と結びつけなければならない。結びつけられる共同体の多くは、「国」や「民族」という概念であり、それにより「XX 語」や「XX 英語」という名称が付けられる。このような言語の捉え方は広く受け入れられているだろう。しかし、このような言語の見方は1つの言語観に過ぎない。後述するように、言語は「社会的なもの以外ではあり得ない」(砂野 2006: 278) のであり、「言語について語ることは、ある政治的立場を表明すること」(同) に他ならない。

しかしながら、大学での授業を通して、学習者の多くが「言語を数えられる名詞」として捉える見方のみを持っており、そのこと自体の政治性に無知ないしは無関心であることに気づく。このような言語に関する認識の狭さは、単なる知識不足では片付けられない。本稿では、言語や文化に対して彼らが抱くイメージ(=言語観)のうち、「言語的多様性」に焦点をあて議論を展開したい。言語的多様性に対する言語観をみることで、彼らの「言語」そのものに対する見方だけでなく、その背後にある政治性を垣間見ることができるからである。続く2節では、本稿における考察の対象および方法を示す。

私たちは他者との相互作用の中で生きている。そこでは他者とのコミュニケーションが日常的に行われている。言語や文化に対する認識により、他者の言動はいかようにも解釈されうる。したがって、筆者は受講生の言語や文化に対する認識に「ゆさぶり」をかけることが肝要であると考えている。ここでいう「ゆさぶり」とは、さまざまな言語文化的事象への気づきを与え、動揺させたり感動させたりすることである(仲 2012: 48)。言語文化観をゆさぶることで、言語や文化、社会、さらにはコミュニケーションに対するさまざまな見方を与え、他者との対話における発話に意味づけするためのリソースを豊かにすることができる。このような認識のもと、3節では筆者の受け持っている全学共通教育科目「異文化論」の講義のうち、言語的多様性を扱った部分を取り上げる。それにより、彼らが授業を通してどのように言語文化観がゆさぶられたのかを伺うことができると考えるからである。

2. 考察の視座

筆者は、2020年度に全学共通教育(一般教養科目・人文科学領域)において、「異文化論 - 社会の中の言語、言語の中の社会」という講義を開講した。受講対象は、岐阜大学の全学部生である。本講義においては、初回時に受講者に対して簡易なアンケート調査を実施した。その主たる目的は、受講者の社会や文化、言語に対する問題意識や興味関心を知ること、あらかじめシラバスに記載している講義内容をベースとしながらも、より受講者の問題意識・関心に即して授業を展開するためである。

2.1 考察の対象

2020年度の登録受講者数は92名で、その所属学部および学年は次の表の通りである。

	教育部	地域科学部	医学部	工学部	応用生物学部	計
4年生	0	1	0	0	0	1
3年生	1	0	0	0	0	1
2年生	1	2	0	3	0	6
1年生	19	7	4	41	13	84
合計	21	10	4	44	13	92

(単位=人)

表1. 「異文化論」受講者の属性

これらに加え、毎回数名の聴講者がいた。そのため、初回時におけるアンケート調査の回答数は、94名であった。アンケートには Google Form を用い、スライドに投影された QR コードを受講者がスマートフォンで読み込み、その場で回答した。

2.2 考察の方法

初回時のアンケート調査における質問項目についての回答、および各授業終了後の課題である小レポート（後述）を考察の対象とする。

本稿では「言語文化観」を、言語や文化に対してどのような意識を持っているか（＝言語意識）、および他者の言語使用に対して意識的／無意識的に抱く態度を合わせた意味として用いている。私たちは、言語を用いたコミュニケーションを通して、他者との相互依存関係の中で生きている。そのため、言語や文化に対する偏向した捉え方（＝言語文化観）であっては、言語表現力がいくら向上しても、コミュニケーションを通じた人間関係の構築は困難である。本稿の目的は、受講者の言語文化観を明らかにし、言語や文化に関する問題意識を喚起することにある。その先には、言語を用いたコミュニケーション力の向上や、言語を教える職業に就く場合に基盤となる言語教育観を豊かにすることを見据えている¹⁾。

なお、授業終了後の小レポートは、筆者のオンライン・ブログ (<http://cyber-tama5.cocolog-nifty.com/blog/2020/10/post-903c2e.html>) において「授業内容の中で、どのような点で言語文化観がゆさぶられたのか」というテーマでコメントを書く、という課題である。

3. 考察：受講者の言語文化観とその変化

本節では、講義初回時にとったアンケートをもとに、筆者の「異文化論」を受講する前に受講生たちが抱いていた言語文化観と、受講後にオンライン・ブログに書き込んだレポートを元に、どのように彼らの言語文化観がゆさぶられたのかを考察する。なお、筆者は受講者の言語文化観にゆさぶりを与えることを目的としているため、受講者の言語文化観に対し強制的に変容を迫ることは望んでいない。あくまでも、言語や文化に対して多様なものの見方を与え、自らが判断できるリソースを提供するよう心がけている。

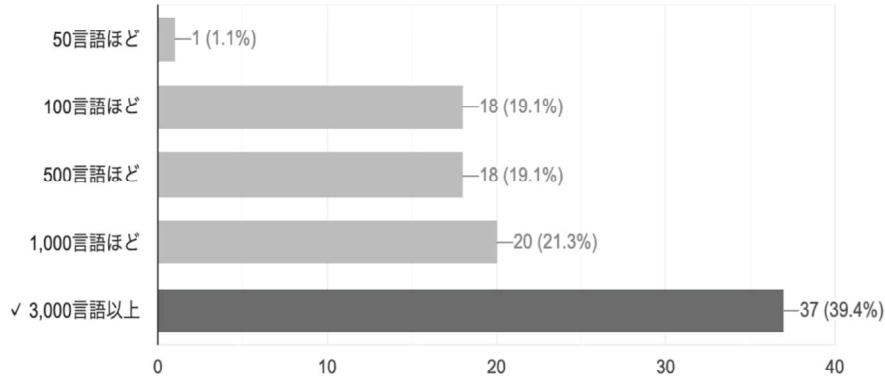
3.1 世界の言語数について

3.1.1 受講生の言語文化観

Q.1 では「世界の国はいくつぐらいか」を問うた。これについては、多くの受講者が妥当な数値を選択している。75.5%の受講者が「200カ国ほど」と回答し、6.4%の受講者が150カ国、14.9%の受

講者が 300 カ国ほどとしている。ただし、1 人ではあるが「1,000 カ国ほど」を選択した受講者もいる。とはいえ、おおむね「世界の国の数」については知っている人は多いといえよう。

Q2.において「世界に言語はいくつぐらい存在するのか」を問うた。これについては、「世界の国の数」と比べ、回答が割れた。



グラフ 1. 世界に言語はいくつぐらい存在するのか

全体のおよそ 4 割の受講者が「3,000 言語以上」と回答したが、それ以外は 20%前後で回答が分かれている。「世界の言語数」については、知識が不足していると考えられる。また、後述するように、そもそも「言語の数」を数えられるとするのは、1 つの言語観である。そこには、民族的・政治的事情が背景にあり、多言語状況を考察する上では、「言語を数えられない名詞として」捉えることから始めなければ、それら民族的・政治的諸問題が見えにくくなってしまふ (酒井 1996 など)。

3.1.2 講義での扱い

本稿の執筆段階 (2020 年 10 月) において、国連加盟国は 193、FIFA 加盟国は 209、オリンピック協会に承認されているのは 206 である。Q.1 は「いくつぐらいの国か」という問いであるため、「約 200」という選択肢が正解となる。

言語の数については、そもそも「言語を数えられる」という発想そのものに問題がある。ひとびとが日常的に用いている「ことば」を、他の「ことば」と区別し、「言語」として数えられるようにするためには、何かしらの共同体と結び付けて捉える必要がある。多くの場合、「XX」という国民や民族という共同体が前提とされ、「XX 語」「XX 英語」という言語共同体の存在が想像される。その上で、多言語状況とは、それら言語共同体が複数並存している状態であると認識される (酒井 1996)。この言語観においては、言語は、明確に他と区別しうる実体として存在すると捉えられている。これを「可算名詞的言語観」と呼ぶことにする (仲 2006)。

仮に言語が数えられる場合、世界には 3,000 とも 6,000 ともいわれる言語が存在する。そうであるならば、世界の国の数を念頭に置いた場合、1 国あたり平均して 15~30 の言語が存在することになる。もちろん実際には、アジアやアフリカ地域において数百単位の多言語状況を持つ場合もあるため一概にはいえない。とはいえ、少なくともあらゆる国・地域が多言語状況であることは確かである。

さて、研究者によって言語数の違いがあるのは、可算名詞的言語観の限界を示唆する。ひとびとが用いることばは、少しずつの差異が連続したものである。言語とは、本来的に境界線が曖昧であり、少しずつ異なる言語が鎖のように繋がっている状態が常態である。これを「地域語の連続体」や「地域語の連鎖」という。例えば、スウェーデン語とノルウェー語は「異なる言語」とされるが、これら 2 言語の間には明確な言語的差異は見られない。それでも両言語が「異なる言語」とされるのは、そ

それぞれが異なる国民国家や民族の「国家語」・「民族語」として創造されたからである。これは、従来「XX 語」「XX 英語」と呼ばれてきたものの内部における雑種性／複数性を問題視しているわけではない。小坂井 (2002) が述べるように、雑種性にしろ複数性にしろ、そういった表現そのものが、対立概念として「純粋性」を論理的に内包している (同: ii)。その意味において、上述した可算名詞的言語観と本質的な違いはない。言語に一定の形状または明確な境界線を想定せず、したがって「数」の概念を適用しないことから言語を考察する立場を、ここでは「不可算名詞的言語観」と呼ぶことにする (仲 2006)。

この不可算名詞的言語観においては、言語にははっきりとした輪郭はなく、1 つの言語共同体に同一化することが出来ないと捉えられている。酒井 (1997) が指摘するように、国民や民族と言語とが互いに対応していない異種混交性の媒体という現実もある。また、小坂井 (2002) によると、外部の観察者からすれば、異なった言語的特徴を有する状況であっても、当の集団構成員は言語境界線を見出さず、1 つの言語として認識する場合もある (同: 12)。

上述した可算名詞的言語観においては、言語は有機的な実体と見なされ、共同体の形象に重ね合わせられてその特徴が考察される。この場合の多言語状況の配置は、「異なった言語と言語共同体の外圧的な並存」 (酒井 1996: 142) として理解されている。

言語と重ね合わせられる共同体は、多くの場合、「国民」や「民族」である。おそらく一般的な「多言語状況」に対する理解は、このような立場であろう。ところが、小坂井 (2002) によると、「民族」という概念も「国民」という概念と同様、実体を持つものではない。

複数の国民や民族がいるために国境や民族境界線ができるのではない。その逆に 人々を対立的に差異化させる運動が境界を成立させ、その後、境界内に閉じ込められた雑多な人々が 1 つの国民あるいは民族として表象され、政治や経済の領域における活動に共同参加することを通して、次第に文化的同一性が進行するのである。

(同: 14)

つまり、「民族」という単位も「国家」という単位と同様に、「政治・経済など外的条件の下に人々が分断され境界が設けられる」 (同) ことによって成立しているという指摘である。

講義においては、これらの言語の捉え方について、いずれかが「正しい」といったことを伝えるのではなく、言語・国家・民族という捉え方そのものに多様性があることを伝えるようにしている。「多言語状況」を考察する上で、このような言語の捉え方そのものの多様性を知っておくことは、「言語」とまとめられる行為そのものが隠蔽する政治性への気づきを促すことにつながりうるからである。

3.1.3 受講生のコメント

アンケートの項目は多岐に渡るが、授業後の小レポートでは、それらのうち受講者自身の言語文化観がゆさぶられた点を書くことになっている。限られた文字数 (上限 400 語程度) であるため、1 つないしは 2 つのトピックに言及する受講生がほとんどである。そのため、各項目に対する書き込みの数には差がある。「世界の言語の数」という点について次のようなコメントがあった。

まず、世界の言語の多さに驚かされた。1 か国当たり 30 言語もあるなんて生活している中で意識したことがなかったので驚いた。だから、自分のネイティブという言葉の意識が違うんだと感じた。
… (略)

(工 1 エピフライ 34 | 2020 年 10 月 16 日 (金) 09 時 58 分)

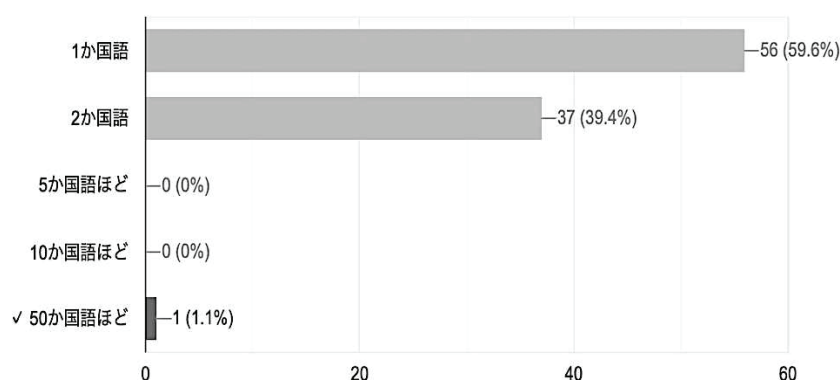
この受講生にとっては、可算名詞としての多言語状況が印象に残っているようだ。そのことから、「ネイティヴ」(原文ママ) という概念を問い直す視点へと結びつけたコメントである。「ネイティブスピーカー」に関する政治性・権力性については、「ネイティブスピーカリズム (native-speakerism)」として、これまでに数多くの研究がなされてきた。例えば Holliday (2005) は、「ネイティブスピーカー」の教師が「西洋文化」を表象していると信じられ、そこから言語的にも教授法的にも理想とされていることを問題視し、同時にノンネイティブの教師が相対的に劣っていると捉えられてしまうことを批判的に検討している。この書き込みを行なった受講者は、「世界の言語の数」を扱った内容から、ネイティブスピーカリズムに問題意識を広げたようである²⁾。

3.2 何ヶ国語話せるのか

ここでは、上記の Q.2 と連動させ「あなたは何ヶ国語話せるか」という質問をした。

3.2.1 受講生の言語文化観

Q.3 は、「あなたは何ヶ国語話せるのか」という質問である。ここで「何言語か」という「言語数」ではなく、「何ヶ国語か」という「国語数」を聞いていることに留意したい。すなわち、Q.2 で回答した数千もの言語のうち、Q.1 で回答した「国」と結びつくという特権性に対する認識、およびそのことの政治性についての認識を問うことを狙いとしている。



グラフ 2. あなたは何ヶ国語話せるのか

英語を公用語としている国・地域は 50 ほどある。ただし、その中には他国から独立を承認されず一方的に独立を主張している国や、一部の国から承認を得ている国も含まれる。それらを差し引いても、受講者の多くにとっての母語である日本語（一部、受講者の中には留学生が含まれているが、その場合はそれぞれの母語）を加えると、おおむね「50ヶ国語」と回答することができる（森住・岡戸・山下・木村 2004: 64）。もちろん、ここでは学習者を授業に惹きつけるための「ネタ」として「50 数カ国語」という捉え方を取り上げているが、受講者の言語文化観のゆさぶりという点では、「国」という概念と結びつくことのできる「言語」の特権性と、その背後にある政治性への気づきを狙っている。

グラフから明らかなように、ほぼすべての受講者が、1 または 2 ヶ国語と回答している。国家と言語との結びつきという、言語間の階層性に関する認識は不足していると考えられる。

3.2.2 講義での扱い

英語で “How many languages do you speak?” のように、「言語数」を聞くことはあっても、“How many national languages ~?” のように、言語を国と結びつけて聞くことはまずない。ところが、日

本語では「何ヶ国語話せますか?」のように、言語を国と結びつけて用いられることが多い。そう考えると、多くの日本人にとって「1 国家 = 1 言語」という言語観は半ば当然視されているといえよう。

しかし、日本国内に目を向けるだけでも、実際には多様な言語状況があることに気づく。仮に議論を可算名詞的言語観だけに限定しても、いわゆるニューカマーがもたらしたとされる多言語状況だけではない。それ以前から、オールドカマーの人びとの母語もあれば、さらにアイヌ語や琉球王国のことばの存在もある。これらを考慮すると、「多言語社会日本は、いまそこにあるものだけではない。かつて、あったものなのである」(安田 2003: 15)。つまり、社会言語的事実としては、日本は「ニューカマー」以前から多言語社会だった。それにもかかわらず、多くの受講者にとっては「単一言語国家・日本」という言語観が形成されており、その1つの現れが「何ヶ国語」という表現である。「言語を国と結びつけて捉える」という見方は自明視されており、そこに底流する政治性や抑圧的・差別的な言語観は顧みられることは皆無のようだ。

3.2.3 受講生のコメント

授業において、「何ヶ国語」と「何言語」とで大きな違いがあることに言語文化観をゆさぶられた受講者は複数いた。

「なんか国語を話せる。」という言葉と「何言語話せる。」という言葉は全く違う意味を持っていることを初めて知って印象に残った。

(工1 ぼむ 73 | 2020 年 10 月 12 日 (月) 21 時 59 分)

「何か国語」と「何言語」では、非常に似たような言葉だが、実際の意味するところとしては大きく違うことに気付かされ、とても面白いと感じた。

(教 1TN01 | 2020 年 10 月 15 日 (木) 21 時 32 分)

可算名詞的言語観を問い直し、そこに底流する政治性・権力性を考える契機としては、「50 数カ国語、話せます」という筆者の発言は、インパクトがあるようだ。

3.3 英語の多様性について

全 15 回の講義のいくつかの回では、世界における英語の多様性を扱う。これについては、授業初回のアンケートではなく、その解説にあたる第 2 回授業時に音声資料を用い、その場で受講者に直接尋ねた。

3.3.1 受講生の言語文化観

受講生には、4 種の英語の音声を聞かせたのちに「どれがネイティブなのか」という問いかけを行なった。ほぼ全ての受講生が英語の音声を聞いただけでは、その音声が母語話者によるものなのか否かを判別できなかった。音声を聴き終えた受講生の多くが、このような質問項目は想定外であり、音声の特徴ではなく「話されている内容」に集中していた。「英語を聞いてください。後で質問をします」と筆者が言った場合、彼らは英語の音声の特徴ではなく、話される内容により注意を払ったのだ。

3.3.2 講義での扱い

受講者に聞かせる 4 種の英語には、いわゆる英語の「ネイティブスピーカー」の音声だけではなく、非母語話者のそれも含む。これらの音声をリスニングさせた後に、4 種とも「ネイティブ」なのか、3 種が「ネイティブ」なのか、2 種なのか、1 種なのか、あるいはすべて「ノンネイティブ」なのか、を問うた。先にも述べたが、ほとんどの受講者は、まったくの見当違いの回答であった。また、4 種

のうち1種だけ、英語のネイティブスピーカーであると伝えた後に、「どれがネイティブスピーカー」の英語なのか、を問うたところ、正解したのはわずか10名であった。

ブリティッシュカウンシルによると、世界の英語使用者はおよそ17.5億人とされる(British Council 2013:2)。この数値が公開された2013年にWHO(世界保健機関)が発表した世界の総人口数は、約70億人(6,941,907)であった。およそ4分の1が英語使用者ということになる。この数値は、他の言語と比べた場合には「多い」と感じるかもしれない。その逆に、世界の総人口に占める割合という点からすれば、「少ない」と感じる者もいるだろう。最終的な判断は受講者に委ねているが、少なくとも「英語は国際共通語」という言葉により、「英語ができれば、世界の誰とでもコミュニケーションを図ることができる」というイメージを持っていた受講者にとっては、このような社会言語的事実からの問いかけは、そのイメージを再考する契機になったようである。

そして、17億人と数えられる「英語使用者」は、「母語話者」としての数値ではない。むしろ第2言語として英語を使用している人口が大きく上回る。その第2言語としての英語使用者たちは、受講生の多くが学校教育で学んできた「標準的な英語」とは異なる独自の言語的特徴を形成し続けている。

英語の変種に関する研究は、とりわけ1970年代以降盛んに行われてきた。受講生の中には、大学での留学生との交流などから、「さまざまな英語」の存在を認識している者もいる。そこで、変種間の理解度に対する疑念を抱く学習者もいるだろうと想定し、Smith & Rafiqzad (1979)による古典的な研究についても言及をした。これは、母語の異なるさまざまな英語使用者を対象に、お互いの英語について理解のしやすさという観点で比較した実証的研究である。その結果の一部であるが、教養あるアメリカ人の英語の理解度が55%であったのに対し、教養ある日本人の英語は75%であった(同)。つまり、「母語話者らしさ」は必ずしも国際的な場面における「理解のしやすさ」を保証するものではない。

3.3.3 受講生のコメント

日本人の英語が国際的な場面で理解されやすいという実証的な研究の紹介に対して、多くの受講生の言語文化観がゆさぶられたようである。また、英語の音声をリスニングする上で、発音のことよりも話されている内容へ自然と集中することにも「気づき」を喚起できたようである。そのため、数多くのコメントが寄せられたが、ここでは一部だけ取り上げておく。

… (略) 英語を母語としない私たちは完璧な英語を話さないといけなく思っていて、消極的になりコミュニケーションを避けてしまう。このグローバル化の社会で、積極的にコミュニケーションをとるためには、言語というものの自体への見方を変えるべきだと思う。SinglishやEnglishなど、少なまった英語があるように、言語の多様性は当たり前なので、私自身もその多様性を認めていきたいと思った。

(地1 たけ49 | 2020年10月12日(月)18時01分)

… (略) これまでは完璧な英語発音を追求しすぎて、どこかネイティブの発音と違うと思ったら、すぐ挫折してしまい、英語を話すのも消極的になっていたが、実際ネイティブの音声を聞いてもそんなに大した違いは分からなかったし、またノンネイティブの方が言葉やジェスチャーを使ってネイティブよりも伝わることもあり、技術よりも気持ちの方が大事だと分かり、これから英語を完璧に話さなくても恥ずかしくなく積極的に自分の気持ちを伝えていきたいと思えます。

(工1 呂洋51 | 2020年10月12日(月)19時24分)

リスニングで、話している人の話し方よりも話の内容を重視するということに納得した。私も聞いている時、内容を聞き取ろうとしていたので話し方は気にしていなかった。自分がネイティブだと思ったものが実は機械の音だと知り、衝撃を受けた。

(工1 ゆいか 17 | 2020年10月12日(月) 22時48分)

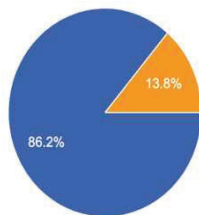
このように講義を通じて、言語と社会・文化について知ること自体が「ゆさぶり」になっている受講者もいれば、自らのコミュニケーション観の変容へとつなげている者もいた。

3.4 英語帝国主義について

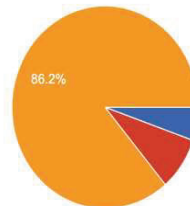
Q5.においては、「ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う」ことを、(1) そのとおり、(2) いいえ、英語で十分、(3) 何とも言えない、の3つから選択してもらった。

3.4.1 受講生の言語文化観

グラフに見るように、「英語で十分」と回答した受講者はいなかった。ところが、後述するように、受講者の中には、「世界の言語は英語だけでよい」と考える者もいた(本稿3.4.3を参照)。Q5に関連して、Q6では「少数民族や先住民族のことばは滅亡しても仕方がない」と思うかどうかを、① そのとおり、② いいえ、英語で十分、③ 何とも言えないの3つから回答してもらった。Q5では「英語で十分」と回答する者はいなかったが、Q6では少数言語が消滅することを当然視したり、英語だけで十分だと回答する者がごく少数ではあるがいた。



● その通り。
● いいえ、英語で十分。
● 何とも言えない。



● その通り。
● いいえ、英語で十分。
● 何とも言えない。

グラフ3. Q5 ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う？

グラフ4. Q6 少数民族や先住民族のことばは滅亡しても仕方がない？

3.4.2 講義での扱い

世界にある数千もの言語の中には、消滅の危機にさらされているものが少なくない。「言語が消滅」ということは、その言語の担い手である「民族」が消滅することを意味すると考えられている。そのような状況に対し、少数言語を保護するという観点から、言語に関するさまざまな権利保障がなされてきた。例えば、「世界人権宣言」(1948年12月、第3回国連総会採択)では、人種/性別/宗教による差別だけではなく、言語による差別も言及されている。また、「国際人権規約」(1996年12月、第21回国連総会採択)では、自らの言語を使用する権利について言及されている。言語問題を人権問題と捉え、言語権という概念も提唱されている³⁾(言語研研究会1999)。

言語的多様性が衰退する一方で、社会的な大言語に権力が集中するという問題も生じている。これを言語帝国主義として批判する研究が、国内外で数多く行われてきた(例えば、Pennycook 1994; Phillipson 1992; 大石 1990; 津田 1990; 中村 1989など)。もちろん、英語は世界の多くの教育現場で学習されている言語であり、圧倒的多数の場面において共通語としての役割を期待されている。したがって、英語を身につけることは「便利」であったり、「グローバル社会へのパスポート」とさえ信じられていることがある。ところが、寺沢(2019)が示すように、英語への権力集中は次第に低下して

いる。「グローバル社会=英語が必要」とする思考は、客観的な根拠にもとづいたものというよりは、イデオロギー的に各個人の判断に影響を及ぼしている面があるのだ。

3.4.3 受講生のコメント

英語帝国主義や英語一極集中状況に関する話題も、多くの受講生の言語文化観をゆきぶったようである。先の英語の多様性に関する項目と同程度に、コメントが集中した。

英語話者がLF user を含めても世界人口の20-25%しかいないことを知り、フランス人に対してもドイツ人に対しても外国人という理由だけで英語で話しかけるのは気を付けなければならないと思いました。…(略)。

(地2 うみ 95 | 2020年10月12日(月)20時07分)

私は以前、英語を話せないのは日本人だけだという言葉聞いたことがあります。しかし、日本など英語を外国語として扱っている国だけでなく、アメリカやイギリスなどの英語圏の国でさえも英語を話さない人がいるということを知り、その言葉は根拠のないことだと知りました。…(略) またネイティブと聞くと、勝手に英語のネイティブと思い込んでしまうということに初めて気がつきました。…(略)

(教1 葵 24 | 2020年10月16日(金)15時44分)

…(略)「ネイティブ」という言葉についてまず英語を思いつくことや外国人と接するとき英語で話し出しがちになることも自分の勝手な先入観や思い込みだったことが分かって驚いた。異文化に対して他の思い込みや先入観があると思うので、多角的に考えていくようにしたい。

(工1 T.O.46 | 2020年10月15日(木)23時50分)

自分が思っているよりも世界には沢山の言語があつて驚きました。そしてネイティブというと英語だけに限ることではないのにネイティブ=英語をスラスラと話すことができることという感覚がほとんどの人に備わっていることに怖さを感じました。

(教1 まき 05 | 2020年10月18日(日)14時23分)

このように、言語的多様性に関する受講者の「思い込み」に対して、社会言語学的な見地から「ゆきぶり」をかけることが可能なようである。

4. おわりに

本稿では、筆者の「異文化論」の授業における第1回のアンケート調査および、それを受けた第2回の解説授業のうち、受講生の言語的多様性に対する認識を扱った。このような考察から、次のようなことがいえよう。

- ・ 多くの受講生は、世界の「国」の多さについては知っているが、「言語」の多さについてはあまり知らない。
- ・ 多くの受講生は、言語は国や民族と結びつけて捉える傾向がある。
- ・ 多くの受講生は、英語の音声上の特徴をもとにリスニングをするのではなく、話されている内容に集中する傾向がある。

- ・多くの受講生は、英語さえできれば世界のほとんどのの人たちとコミュニケーションを測ることができると思いがちである。

このような考察をもとに、2020年度の「異文化論」では、講義内容を次のように練り直した。なお、今年度はコロナ禍のために、対面式とオンラインによる授業動画の配信というハイブリッド形式を実施した。

対面式授業		オンライン授業（授業動画の配信）	
第1～3回	言語文化観を診る	テーマ1 (4本)	日英語発想法の違い
第4回	ICTの進歩から「ことば」について考える	テーマ2 (4本)	多言語社会と共生
第5回	英語の「なんでやねん」?	テーマ3 (4本)	世界の中の英語、英語の中の世界
第6回	・ことばの輸出入 ・平成ソングから再考する共生社会とコミュニケーション	テーマ4 (6本)	英単語のネタ
		テーマ5 (4本)	やさしい日本語
		テーマ6 (5本)	英語の「なんでやねん」：対面式受講者の「なぜ」に答える
		テーマ7 (2本)	異文化理解を問い直す

表2. 2020年度「異文化論」講義内容

もちろん、あらかじめシラバスを示している以上、講義内容を根本的に変更することはできない。しかしながら、その範囲内で受講者の疑問や問題意識を反映した講義内容にしたつもりである。授業動画の配信については、Microsoft Stream を用いて受講登録者のみが視聴・コメントできるようにした。視聴後は動画の下にコメントを残すことを、出席確認および小レポート課題として読み替えた。

「異文化論」の講義全体としては、社会ないしは文化の側からみた「言語」の捉え方と、「言語」から見た社会・文化観の双方を扱った。その接点として授業動画のテーマ3では、世界における英語の位置付けと、多様な英語に見られる特徴的な言語表現から文化観を覗くという内容にした。授業動画については公開しないことを前提に、受講生にコメントを書き込んでもらったため、本稿において取り上げることができないのが残念である。そこには、受講生たちが講義を進めていく上で、本稿で示した受講者たちのコメントと同様に、彼らの言語文化観が何度もゆさぶられ、変容していく姿をみることができる。本講義は2020年度の新規開講科目であり、コロナ禍の中での挑戦ということもあるため、非常に拙い授業となったことは否めない。しかし、彼らの言語文化観にゆさぶりをかけ、「言語とは何か」「文化とは何か」「コミュニケーションとは何か」等を問い直す契機を提供できたのであれば、幸いである。

(本論考の一部は、課題番号 20H01293 の助成を受けている)

【注】

- 1) 政策的にみて、日本の中学校において「外国語」は必修科目であるが、必ずしも「英語」というわけではない。また、英語教育では「国際共通語としての英語」という方針が打ち出された。これらはいずれも『学習指導要領』をはじめとした公文書に明記されており、その意味で言語教育政策を普及する側の視点である。しかしながら、それらが教育現場においてどのように受け止められ、教育者により実践され、学習者たちがどのように受け止めるのかを明らかにしない限り、政策の実態や課題は見えてこない。樋口 (2021 予定) は、『本国』の言語普及の働きかけ以前に『現地』

に元々備わる当該言語の教育基盤、学習者の文化的嗜好、対外認識、普及言語と現地語との親和性などに注目し、当該言語の普及ならびに度合いを現地の文脈で理解、解釈する取り組み」(下線は筆者)を「現地主義アプローチ」と呼んでいる。本稿は、現地主義アプローチから、学習者たちが抱く言語文化観を明らかにする研究であると位置付けられる。

- 2) 2020年度の筆者による「異文化論」では、ネイティブスピーカーリズムの問題について、オンライン授業(授業動画の配信)のテーマ2(「多言語社会と共生」)において扱った。
- 3) 時事ドットコムニュース (<https://www.jiji.com/jc/article?k=20201127040872a&g=afp>)によると、2020年11月26日、フランスの国民議会は「話す時のなまりに基づく差別」を「人種差別の一種」として可決した(賛成98、反対3)。

【参考文献】

〈日本語による文献〉

- 大石俊一(1990)『「英語」イデオロギーを問う』開文社出版。
- 森住衛・岡戸浩子・山下誠・木村護郎クリストフ(2004)「外国語教育は英語だけでいいのかー多様な言語意識を可能にするために」『あえて英語偏重を問うー日本エスペラント学会公開シンポジウム(2001年、2002年)報告集』(日本エスペラント学会) pp.23-76。
- 言語権研究会(1999)『ことばへの権利ー言語権とはなにか』三元社。
- 小坂井敏晶(2002)『民族という虚構』東京大学出版会。
- 酒井直樹(1996)『死産される日本語-日本人-「日本」の歴史-地政的配置』新曜社。
- (1997)「多言語主義と多数性ー同時的な共同性をめざして」三浦信孝(編)『多言語主義とは何か』、pp.228-245. 藤原書店。
- 砂野幸稔(2006)「訳者あとがき」レイ・ジャン・カルヴェ『言語学と植民地主義ーことば喰い小論』三元社、273-280。
- 津田幸男(1990)『英語支配の構造』第三書館。
- 寺沢拓敬(2019)「データで考える英語学習の「本当のところ」」『母の友』6月号。
- 仲潔(2006)「英語論の構図ー英語帝国主義論と国際英語論の包括的理解のために」『言語政策』(日本言語政策学会)第2号:1-20。
- (2012)「言語文化観を育成する「英語科教育法」の実践ー言語文化観のゆさぶり」森住衛(監)『言語文化教育学の実践ー言語文化観をいかに育むか』金星堂。Pp.47-67。
- 中村敬(1989)『英語はどんな言語かー英語の社会的特性』三省堂。
- 樋口謙一郎(2021年3月予定)「対外言語普及と『現地主義』アプローチ」『なじまあ』No.11(立教大学アジア地域研究所)。
- 安田敏朗(2003)『脱「日本語」への視座ー近代日本語史再考II』、三元社。

〈英語による文献〉

- British Council (2013). *The English Effect*. [<https://www.britishcouncil.org/research-policy-insight/policy-reports/the-english-effect>]
- Holliday, A. R. (2005). *The struggle to teach English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Pennycook, A.(1994). *The Cultural Politics of English as an International Language*. Harlow: Longman.
- Phillipson, R.(1992). *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Smith, L. E. and Rafiqzad, K. (1979) "English for cross-cultural communication: The question of intelligibility," in *TESOL Quarterly*, Vol. 13, No.3: 371-380.

